7　ヨテコ沢伝説

昔々のこと、この湯の村は漁業と山の仕事、それに自給できるだけの田んぼがあって、豊かに暮らしていた。村の庄屋の家には三人の年ごろのきれいな娘がいた。

また院内岳には、性根の悪い猿の一家が住んでいた。この猿の息子が、ある年のこと山の木の実が不作だったことから下の村へ下りてみたところ、食べ物の豊富なことに驚いた。それから猿一家ではこの村を荒し回って生活するようになり、村の人々が止めようとすると、暴れ回る始末で、どうしようもなく、困った、困ったと嘆くばかりだった。

ある日のこと、庄屋の家に盗みに入った猿の息子が、そこで三人の娘を見て一目惚れをしてしまった。息子は家に帰って三人のうちの誰でも良いから嫁に貰ってくれと親にねだった。親猿が庄屋の家に行ってみたところ、息子が言うように良い娘たちだったので、さっそく庄屋に娘を息子の嫁にくれと申し込んだ。もちろん庄屋は、いくらなんでもかわいい娘を猿になどやれないと断ったのである。

ところがそれから、猿一家は毎日のように村に来て、娘をくれるまで荒らし回ってやるといって荒らし回り、暴れ回る始末で、庄屋も困り果て、三人の娘に相談した。「誰か猿の息子の嫁に行って呉れないか。誰かが嫁に行かないと村がつぶれてしまう、村のみんなのために頼む」というと、姉娘は「いくら親の頼みでも猿なんかには行かない」と断った。中の娘も「姉さんが行かないのに何で私が行かなければならないの、私も断る」ということで、庄屋は一番かわいがっていたヨテコ（末娘）に、「お前はどうだ」と聞いた。親の苦しみを察したヨテコは「私が嫁に行きましょう」と答え、庄屋のヨテコと猿婿との婚礼が行われた。婚礼の翌日、猿婿はヨテコの家にお里帰りに行くことになった。

婿に「ヨテコ、お里帰りに持って行く物は何が良いのか教えてくれ」と聞かれてヨテコは、「お里帰りにはひと臼餅を搗いて持って行くのが決まりになっている」と答えた。そこで婿は早速餅を搗き臼から取り出そうとした時、ヨテコが言った。「私の家の者や村の人たちがこの家の匂いがついた餅を食べないと困るから、臼から開けないでそのまま持って行って下さい」と頼んだ。婿はかわいい嫁のヨテコの頼みなので、「よしよし」と、石臼に餅を入れたまま背負って出かけた。四月の末のことなので山を下る途中には紅山桜の花が満開であった。ヨテコはそれを見ると、「わあー綺麗だ、ひと枝折って実家の人たちに見せてあげたい」と言ったのだった。

猿の婿は「それならお安いことだ、折ってあげよう」と臼を降ろそうとした。ヨテコは「婿殿、臼を降ろすと土の匂いが付いてせっかくの餅が食べられなくなるからそのままで何とか登れないか」と言った。婿は「なるほどそれもそうだ、よし俺は猿だからこれぐらいの物を背負っても平気だ」と言って臼を背負ったまま木に登った。猿婿は下の方の枝をつかんで、「ヨテコこれはどうだ」と聞いた。ヨテコは「下の枝は埃が付いているから駄目だ、もう少し上の方が良い」と言った。猿婿は中ほどの枝まで登って、「これはどうだ」と聞いた。ヨテコは「それも良いがもっと上に綺麗なのがあるようだ」と答えた。猿の婿は梢近くまで登り、「これはどうだ」と聞いた、そこでヨテコは、「もうちょっと上にあるのが良い」と答えた。猿婿はとうとう梢まで登り、これで良いかと言いながら枝を折ろうと力を入れてそり返ったところ、自分の体重と石臼、それに餅の重みで枝は折れ、猿の婿は石臼と一緒に地面に落ち石臼の下敷きになって死んでしまった。

これは実はヨテコが最初から考えてやったことだった。しかしかりにも自分の婿として祝言を挙げた猿の婿であることからヨテコは実家には帰らず、田沢湖畔の河童の淵に身を沈め、自らの命を絶ったという。



ヨテコ伝説を伝えるカッパ淵の松